ビックニュースが飛び込んできた。中央大学卒業生の祭典、第25回・ホームカミングデーで、異例の「親子四代」となる堀場ファミリーが表彰された。

学生記者　山田亮太朗（法学部２年）

中央大学に学んだ親子三代が希少と言われ表彰の対象となる中、親子四代には特別な思いが生じるようだ。10月23日、会場は多摩キャンパス９号館クレセントホール。司会者から紹介されると、「オーッ」といった驚きの声が館内から上がった。

この日表彰された親子三代は10組。堀場家の番がやってきた。深澤武久理事長が表彰文を読み上げる。

ステージ中央で、堀場正直氏（85）、正明氏（58）、真貴子さん（法学部２年）が、こうべを垂れている。初代の直一氏は泉下の人となった。初代から四代目まで、生年月日でちょうど100年１カ月の歳月が流れる。

祖父が壇上に用意された自席へ戻る際、孫娘は祖父の手を取り、腰を支え、いたわった。次の瞬間に振り向き、来場者席へ深々と頭を下げた。

祖父は前日まで入院していた。「大丈夫ですか、行けますか」と気遣う周囲に、「俺は行く、絶対行く」と気丈だった。診察で異常なしと分かり、当日を迎えた。

式典前には胸に来賓を表す赤い花が付けられた。花を見て「大きいな」とほほ笑み、表彰式を喝采の中で終えた。

「親孝行ができた」と笑顔の父。「私も祖父や父が喜んでいる姿を見て、うれしくなりました」と真貴子さん。

「祖父からみたら、子から孫へと受け継がれるのですから、感じ方が違うようでした。代は変わっても長い間、中央大学を見ています。母校への思い入れは代を重ねることで深まっていくのでしょう」と感慨無量な祖父の気持ちを思いやる。式典で曾祖父の名前が広く紹介されたことには、「曾祖父に会ったことはありません。しかし曾祖父から私へとつながる系譜を感じました」としみじみ話した。

今回の表彰式やインタビューに先立ち、祖父と父から曽祖父の話を初めて聞いた。

明治29年生まれの初代の直一氏は、1921（大正10）年に専門部経済科を卒業した。経済科から法曹界入りを目指したとあって、在学中は勉強量が相当多かったと思われる。しかも働きながら学費を稼いだ。苦労の末に弁護士となった。

100年の歳月を超え中大に学ぶ。親子四代・堀場ファミリー。

4
four generations

表紙の人

堀場真貴子さん

２年後の1923年９月、関東大震災に見舞われる。公私とも労苦をいとわず働いたことは想像に難くない。

二代目の正直氏も弁護士で、1953（昭和28）年に法学部を卒業。仕事には厳しくも優しい人柄で多くの知己を得たという。直一氏からは、人生を賭けて仕事をしなさい、との訓示があったという。

三代目の正明氏は1982（昭和57）年法学部卒業。正明氏入学の頃から、中大は法学部などの文系学部が駿河台校舎から多摩キャンパスに移転した。

大学の最寄り駅は多摩動物公園。多摩モノレールの全線開業は2000年１月10日だ。

学生運動は全国的に退潮傾向にあったが、中大では学生活動家が授業中に乱入した。受講学生に「尊敬する人物を３人書け」と強要する出来事があった。

「私には想像もできないようなことばかりです。普通に授業を受けられる今の時代を恵まれていると感じました」

堀場ファミリーは祖父・祖母と同居する６人家族。「うち４人が中大です。妹は中央大学附属高校３年生。中央大学という共通の話題がありますので、会話が弾みます。同じ大学でも時代の違いを感じて面白いです」

真貴子さんは中学・高校と女子校育ち。大学受験では法学部を志望した。「祖父の影響を強く受けています。祖父の姿を見て憧れました」

祖父、父は受験校選びでも当人の意思を尊重した。司法試験に対するバックアップの強さに惹（ひ）かれ、中大法学部へ入学を決めたときだった。「祖父、父ともすごくうれしそうでした。２人は中大が大好きなんです」

現在の彼女は、法曹を目指す学生が自主的に組織する学術研究団体連合会（通称・学研連、計６団体）の「済美会」に所属。炎の塔（多摩学生研究棟）で勉強の日々を送っている。関心を示すのは民法だ。３年次から始まるゼミでも民法を選んだ。

済美会入りして、先輩諸氏の大きな存在を肌で感じた。助言を得る、経験談などを聞くことで、自らの勉強意欲がかき立てられるのだ。

学友会公認サークル「英米法研究会」にも所属し、外国の法律にも目を向ける。白門祭（11月・多摩）では陪審制の模擬裁判を開催した。

２年目の今回は責任者になった。来場者に陪審員役を託し、被告が有罪か、無罪かを判断する。舞台裏では、裁判長役の学生が着用する法服を裁判所から借りてきて、裁判に〝臨場感〟を出すなど工夫した。

勉強の合間によく見るのが映画だ。中大ＯＢ・新海誠監督作品による話題のアニメ映画『君の名は。』はお気に入りの１本。友人の勧めで前作『言の葉の庭』からのファンという。

新海監督とはホームカミングデーのステージを時間差で共有した。午前に堀場ファミリー、午後に同監督らによるトークショー。「すごいですね、うれしいかも」と、はにかんだ。

中大に学ぶ学生が親子四代まで続くと、「五代目」が気になるものだ。真貴子さんが言う。

「祖父や父が私の意思を尊重してくれたように、私も子どもの選択に任せたい。私が弁護士になって、その姿を見て、子どもが自分の意思で中央大学に入りたいと思ってくれればうれしいです」と言い、こう付け加えた。

「実現したら、いいですね」

Horiba family

堀場ファミリー

		生まれ	卒業（在学）
曾祖父	直　一氏	1896年６月	1921年専門部経済科
祖父	正　直氏	1930年12月	1953年法学部
父	正　明氏	1958年５月	1982年法学部
長女	真貴子さん	1996年７月	法学部２年

写真で見る中央大学の歴史（中央大学大学史資料課所蔵写真より）

□曾祖父のころ

錦町校舎（1918年8月竣工）

秋季運動会（1920年10月24日 於 中野運動場）

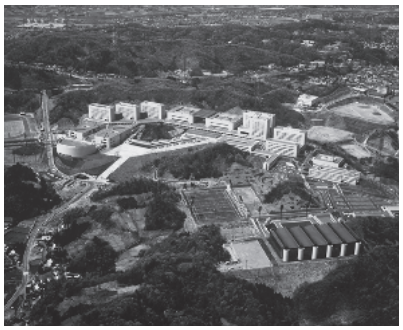
□祖父のころ

駿河台校舎南門（旧正門）付近

駿河台校舎中庭

昭和20年代なかばの学生（於 駿河台校舎中庭）

□父のころ



1978年開校当初の多摩キャンパス全景

入学試験終了後、構内よりバスで退場する受験生
（1983年2月14日 於 多摩キャンパス）

2016年秋 テミス像の前で堀場さん

four generations